みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

ケアの歴史人類学：生きる時空間と人生の渡りの探求：共同研究：ウェルビーイング（福祉）の思想とライフデザイン（2008-2011）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-02-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 七美 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4887

PROJECT

ケアの歴史人類学：生きる時空間と人生の渡りの探求

文・写真
鈴木七美

共同研究 ● ウェルビーイング（福祉）の思想とライフデザイン（2008-2011）

少子高齢化・多元化する社会で、私たちは、「安心」して暮らすことや「希望」を抱いて生きるための諸要素の検討を迫られている感がある。これらの問いは、暮らしの場をいかに共有してゆくのかを問い直す契機にもなっている。

「ウェルビーイング Well-Being」は、人間や共同体が全体として心地よいといった意味で使われてきた語である。日本ではウェルフェア同様に「福祉」とも訳されてきたが、20世紀には、病気に罹患していないという意味に留まらない「良好な状態」として、「人間の全体性」を視野に収めた「健康」を定義し、「生活の質」を構成するという意味で提示された（1946年世界保健機構憲章草案）。とはいえ、すべての人の声を掬いとり、多様なベクトルを有するウェルビーイングを調整するには、共有の場の構想と調和への実践が、常に、批判的に問い直されなければならない。

ワークショップ「広がる教育空間」（国立民族学博物館）。

こうしたテーマを共有するこのプロジェクトは、学際研究の場として現地調査にもとづく個人研究と実践経験とを結びつけ、多様な文化的背景を有する人びとが、既成の生活様式に縛られずに、生きる時空間を共有するに資する情報を発信することを第一の目的としている。成果公開の概要を示した後、さらに深めるべき課題を明示する。

1. 国際シンポジウム「子どもたちにとっての未来社会――北欧の思想と実践――」（2010年3月6日）

近年、移民受け入れによる人口調整と就業を前提とした社会を構想してきた北欧諸国のウェルビーイング観と諸問題に関し、デンマークとノルウェーの子どもたちに焦点をあてて検討した。これらの国々では、「自律」が市民にとって不可欠だという観点から教育が進められてきた。それは、民主主義に立脚した市民社会を構成する「デンマーク人」などの育成という側面を有している。また、学校外の生活圏における余暇活動が、子どもたちの可能性を広げるとされてきた。これはデンマークのN.F.S.グルントヴィが主唱した対話による民衆教育の伝統に遡り、意見を述べ交流し共生空間形成に参加する経験を培うことを目的としている。

だが、民主主義を構成してきたこれらの思想や実践も、文化的背景の異なる人びとが意義を見いだすとは限らない。教育費がかからず、システムとしては誰にでも開かれた教育も、その目的に関わる思想が理解され共有されなければ、排除や境界は子どもたちのあいだでも見いだされる。そもそも、ウェルビーイングに関する子どもたちの声を聴き取ることが十分になされてはおらず、「対話」を実現する方途が教育現場や地域で課題となっていることが指摘された。

シンポジウム「子どもたちの未来社会」（国立民族学博物館）。

2. 国際ワークショップ「広がる教育空間――子どもたちのウェルビーイングから考える――」（2010年3月7日）

日本のケースを中心に、オルタナティヴと位置づけられた学びの場に関する現地調査と実践報告を受け、学ぶことの意味や「希望を抱き心地よく生きること」に関し議論を深めた。「民族学校」における外部との交流、芸や作務をとりいれた学校における「自由」の意味、農業によって子どもたちに職業と国際交流への道を開いてきた学校、「不登校」が問題化される経緯、ホームスクールや博物館など学校外の学びなど8報告を検討した。

文化の一つである教育の意味を常に問い直すことが、多様性に富んだ場や複層的なルートを、人びとを包み込む社会の一つのしくみとして開拓するための出発点となろう。

3. 国際研究フォーラム「21世紀を生きるアーミッシュ――日々の助け合いから国際協力へ――」（2009年6月21日）

教育や学びに関する信条にもとづき高等教育を否定し、国や州と対立してきたアメリカ合衆国の改革派プロテスタント再洗礼派アーミッシュの思想と実践について、信念をいかにしてアメリカ社会において実現してきたのかに焦点をあてて検討した。教育の第一の目的は、コミュニティで充足して暮らしていく術を身につけることである。それは、自然のリズムにしたがって生活の糧を得るために作業し、役割をもち、他者と交流し協働することである。したがって、教育の場は、大地と教会、そして通過儀礼と共食の舞台である家という生活空間そのものである。

裁判を経て獲得した教育に関する自由は、アーミッシュの教育観に共感する人びとの支援によって実現している。家庭とコミュニティを中心とした学びは、チャーチ・スクール、地域の図書館や博物館、そして社会的企業が提供する教材によって、重層的に支えられて

いる。教育空間は、重なり合う幾つもの同心円のような広がりを見せている。

「世界と離れている」アーミッシュが起こした行動によって明示された信念が、文化的背景を異にする人びとの共感を呼び、自らの状況の再考を促す契機となった。同様にアーミッシュの社会保障の否定も、顔の見える関係性を重視するアーミッシュの主張をとりいれ、支援を双方向のコミュニケーションと捉える視点にもとづく「社会的企業」の活動に展開している。独自の思想と実践を、異なる生活様式をもつ人々が参照可能なかたちで発信し続けることが、このコミュニティが完全に排除されずに拡大していることに結びついている。重要なのは、「共存」を自分の問題として共有してきた支援者もともにコミュニケーション・アートを培ってきたことである。

高齢者向け複合住居施設を構成する日系ヘリテージ・センター（カナダ、バンクーバー）。

4. 国際ワークショップ「ウェルビーイングの思想と市民の協働――カナダとデンマークにおけるオルタナティヴ・ケアー」／国際研究フォーラム「ライフデザインと福祉（Well-being）の人類学――開かれたケア・交流空間の創出」（2009年2月27日－3月1日）

人びとが自らの生を活かしつつ共存するためには、価値観や信念の吟味、希望や願いを語る声を掬うこと、コミュニケーション・アートを練磨することが不可欠である。こうした関心から、高齢者とともに生活空間の開発に取り組んできた実践者の報告を中心に、議論を深めた。高齢者向け施設のなかでも、多文化社会カナダやアメリカ合衆国で民族文化に配慮したタイプのものは、当初外部に向けて閉鎖的な傾向もみられたが、住人のウェルビーイングに関する希望に応えるにつれて多機能化を遂げ、外部へのいくつもの通路（チャネル）が設けられてきた。未来は「中心のない『個人（市民）の都市』の時代」とも表現されている（黒川紀章『都市革命』）が、イベントやレストランなどミーティング・チャンスを高める要素を付加した施設は、（ノーマライゼーションに配慮した）街の新たな結節点としての役割を果たす可能性がある。流動性を高めた変動体としての施設と外部との連携に関わる調整には、ローカルな視点を活かした「アウトリーチ」という実践現場の知が寄与している。

施設と外部とを繋ぐ通路を利用する人びとの重要な活動として、「ホスピス・チーム」の実践があげられる。それは、看護師、ケースワーカー、牧師などに加えて、友人・知人や家族という施設内外の人びとからゆるやかに構成されている。語り合いや読んでもらうことによる書物に触れる機会は、世界の歴史のなかに自らの生きた時代を位置づけ、宇宙やマクロコスモスへの包摂を問い、ライフステージの「渡り」に際して物語を織り上げる時空間となっている。

4.の成果の一部を『高齢者のウェルビーイングとライフデザインの協働』（2010年）として提示した。書籍編集と成果公開を経て明確化した課題は以下のとおりである。

1)「ケア」として包括される領域を丹念に辿る歴史人類学研究によって、社会的包摂と排除のメカニズムに関する知を精鋭化する。ケア（配慮・気づかい）は、自らに向けられる場合も含まれるが、心身の養生や自己形成を目指す活動は、個人を活かす方向性を有しつつも、この観点を共有しない者を排除し、齟齬や軋轢を生む可能性を有しているからである。弱者が生活できるよう環境を整えるノーマライゼーションの設計に留まらず、すべての人が自ら構想するノーマライゼーションに関わる希望や声を掬いとり調整してゆく過程には、文化人類学研究の視点を活かしたライフデザインの協働が有効であることが明確である。

2) 生老病死を渡りゆく人間存在に注目することによって、「マクロコスモスへの包摂」に関わるケアとしての実践の重要性が浮かび上がってきた。常に変動のなかにある人間のウェルビーイングを構成する要素として、生活支援の確保、アイデンティティの保持などに加えて、近年、「スピリチュアリティ」が注目されている。緩和ケア支援やホスピスとしてのチームケアの重層化に向けて、歴史人類学の視点による「渡り時空間」の知見を蓄積することが不可欠である。

3) 死を意識する時期に限らず、間断なく変化に晒される人びとが、いかに変動を渡り生き延びられるのか、人びとの漂いに資する時空間をどのように構想するのかが、ケアの歴史人類学の課題として明確となった。時間の使い方や人間関係のありように関する既成観念を問い直し、生活様式の多様性を許容しあうゆるやかな生活の場を構想することが、希望社会への道を拓くことに繋がる。

すずき ななみ

先端人類科学研究部教授。専門は歴史人類学・医療社会史。著書に『出産の歴史人類学』（新曜社 1997年 第13回青山なを賞）、『癒しの歴史人類学』（世界思想社 2002年）、編著書に『高齢者のウェルビーイングとライフデザインの協働』（藤原久仁子・岩佐光広と共編 御茶の水書房 2010年）、論文に「コミュニティ創成と健康・治療・食養生」（関西アメリカ史研究学会編『アメリカ史のフロンティアⅠ アメリカ共和国の形成と変容』昭和堂 2010年）、Popular Health Movement and Diet Reform in Nineteenth-Century America（*The Japanese Journal of American Studies* Society for American Studies in Japan 21（特集“food”）:111-137 2010）など。